

# 「心と言葉のグローバル日本語文法」

## 要約

### 〈はじめに〉

#### 【要約】

- 私たちは日本語の文法を知らなければならない。日本語がどのような言語なのかを知ることは、日本人が日本人として自分自身の姿を知ることにはかならない。自分自身を正しく知らないかぎり、他者を正しく知ることはできない。
- 日本人は日本語の文法について学校でなにも習っていない。たとえ国文法をマスターしたからといって日本語の世界の本質を理解することはできない
- 文章の書き方についても私たちは学校でなにも習っていない。
- 必要なのは何物にも囚われずに日本語の姿を正面から見つめ直すことである。

### 第1部 日本語と文法

#### 【要約】

- 英文法の歴史——15、16世紀ぐらいまで英語には「文法」と呼べるものはなかった。イギリスで英語の文法をつくろうという機運が高まったのは16世紀の終わり頃のことである。当時のイギリス人は自国語たる英語に対して強い劣等感を抱いており、その劣等感を克服するために、当時まだ貧弱であった語彙を増やし、独自の文法を確立しようとした。
- さまざまな試行錯誤ののち英文法が完成期を迎えたのは、1795年に発刊された Lindley Murray の English Grammar に至ったこととされている。それから約200年の長きにわたってイギリスやアメリカの人々は Murray が完成させた英文法を使って英語の体系を理解し、学習してきた。
- 日本語文法の歴史——史上初の日本語文法書はイエズス会宣教師のジョアン・ロドリゲスの『日本語文典』（1604-08年ごろ）とされている。その後、江戸時代後期に富士谷成章、本居宣長、本居春庭、鈴木胤など日本語人の文法学者が生まれた。
- 近代日本初の日本語文法は「大槻文法」である。大槻文彦は文部省からの委託を受けて、日本初の国語辞典『言海』をつくりあげた。その巻頭部分としてつくられた「語法指南」が1897年（明治30年）に『広日本文典』として独立して出版された。これが近代日本初の「公的」日本語文法書である。その後、「大槻文法」は「国文法」と呼ばれて国民教育の普及とともに急速にその影響力をしていった。
- 「国文法」は、小国日本が欧米列強に一刻でもはやく追いつくために英文法を参考にして急ごしらえでつくりあげたものであった。そのために当然ながら本家本元である英文法の影響を強く受けることとなった。こうして日本語の実態を反映していない文法概念が学校国文法のなかに数多く盛り込まれることになった。

- 1970年代ごろになると、明治以降の伝統の流れをくむ学校国文法が持つ矛盾点を指摘する声は徐々に高まってきた。その中心のひとつとなったのは、外国人に日本語を教える日本語教師たちであった。こうして新しいかたちの日本語の文法が「官」（国家）とは離れたところで構築されていくようになった。このようにして構築された文法体系は、従来の官制の文法が「学校国文法」と呼ばれるのに対して、ただ「日本語文法」と呼ばれている。
- 日本語を樹木に例えると、二度たいへんな接ぎ木をされた樹木である。最初は1500年ほど前の中国語の接ぎ木であり、二度目は200年ほど前の西欧語に接ぎ木である。そうやって二度の歴史の激変期に大きな接ぎ木をして生き延びてきたものであるから、その格好はとても奇妙なものになってしまった。このサクラだかマツだかスギだかわからないかたちになった言語が、現代日本語である。そして日本語人の心情や思考とは、この数奇な運命を経てきた樹木の果実である。
- このように現代日本語は「和」「漢」「洋」の三脚があってこそ成り立っているのであって、そのうちの一脚でも欠けてしまうと現代日本語は現代日本語として成り立たなくなる。これが私の「現代日本語三脚論」である。現代日本語のように三脚によって支えられている複合言語は世界でほかに類をみないと私は考える。

## 第2部 心と言葉のグローバル日本語文法

### 1章 日本語文の三層構造

#### 【要約】

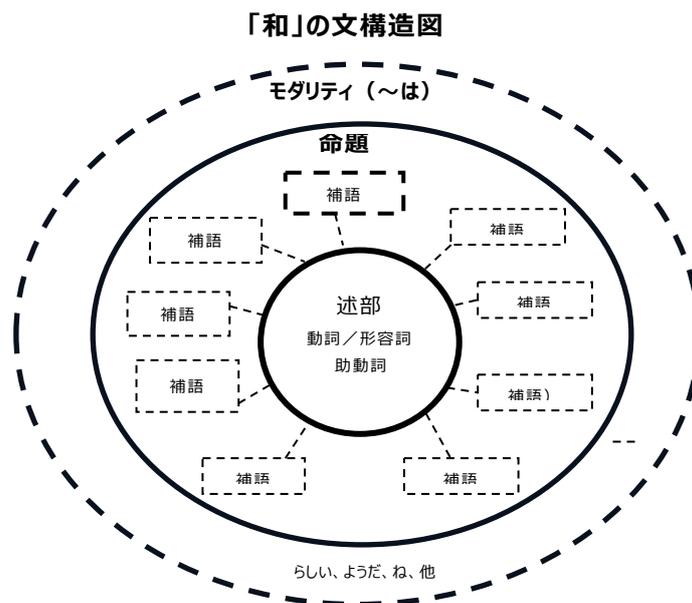
- 「心と言葉のグローバル日本語文法」では言葉の働き（機能）として「命題/叙述内容(認識・思考)」「対事的モダリティ(判断・態度)」「対人的(モダリティ伝達)」という3つのカテゴリーを設定している。
- 言語において客体として表現された「認識や思考のまとまり」のことを「命題/叙述内容」と呼ぶ。「命題/叙述内容」とその要素に対する主体的な判断・態度のことを「対事的モダリティ」と呼ぶ。「命題」「対事的モダリティ」をその場のコミュニケーションの相手側に伝えるうえでの伝達のあり方(丁寧/非丁寧、敬意/非敬意、他)のことを「対人的モダリティ」と呼ぶ。
- 私たちはみずからの思考や判断や態度を言語として表現するとき、この3つの機能を一体的に利用している。命題/叙述内容(認識・思考)、対事的モダリティ(判断・態度)、対人的モダリティ(伝達)の3つのアプローチがそろってはじめて私たちはさまざまな事象に対するみずからの心の動きを十分に言語化し、他者と共有できる。
- 言語表現と言語機能の関係性において非常に重要な点は、ひとつの表現が複数の機能を併せ持つということである。ある表現が命題、対事的モダリティ、対人的モダリティという3つの機能のうちどれかひとつの機能だけを持っているわけではない。
- 日本語の文とは、「命題」というあんこが、「対事的モダリティ」「対人的モダリティ」という2枚の皮にくるまれた、「まんじゅう」構造をしている。
- 日本語の表現の最大の特報として対人的モダリティの機能が他の言語に比べて抜きんで強力なことが挙げられる。そのため表現のなかには対事的モダリティもなく、ただ対人的モダリティしか表さない

ものもある。

## 2章 日本語の文の3つの構造——和・漢・洋

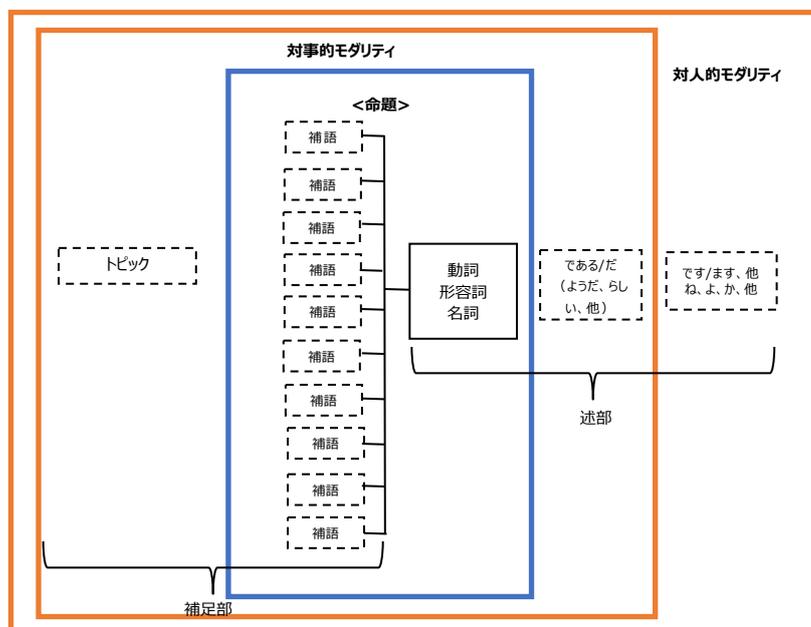
### 【要約】

- 「文」は「単文」(原子命題文)と「複文」(分子命題文)に分けることができる。「単文」は思考のまとまりである原子命題をひとつだけ含んでいる。複文は原子命題をふたつ以上含む文である。いくつかの単文を適切な方法を用いて結合させると複文となる。単文をどのように結合させるかによって複文の性質が決まる。
- 「心と言葉のグローバル日本語文法」では、和・漢・洋の3本の脚に対してそれぞれに異なる文法構造を設定している。これは実践という観点からみると、現代日本語の読み書きをするうえでは非常に役に立つものである。
- 「和」の文構造では話し手/書き手の視点はその目から正面に向かっている。そして聞き手/読み手もまた自分が話し手/書き手のすぐ横にいるとイメージしており、その視点は話し手/書き手と同じ方向をみている。これが「和」の日本語における「わかる」(わかちあう)ということである。



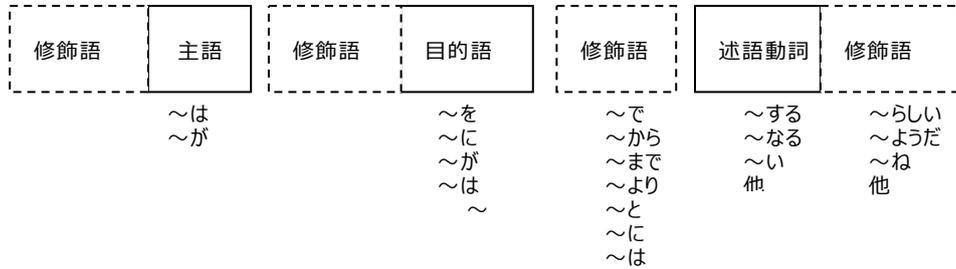
- 「漢」の日本語とは日本語が受容してきた中国語の語彙、構文、思考方法のことである。明治までの日本での公的文体は漢文だった。それと並行していわゆる漢文訓読体も発展してそれが「準」公的文体として用いられた。この漢文訓読体が明治以降につくられた法律文体や学術文体のベースとなっている。

### 「漢」の文構造図



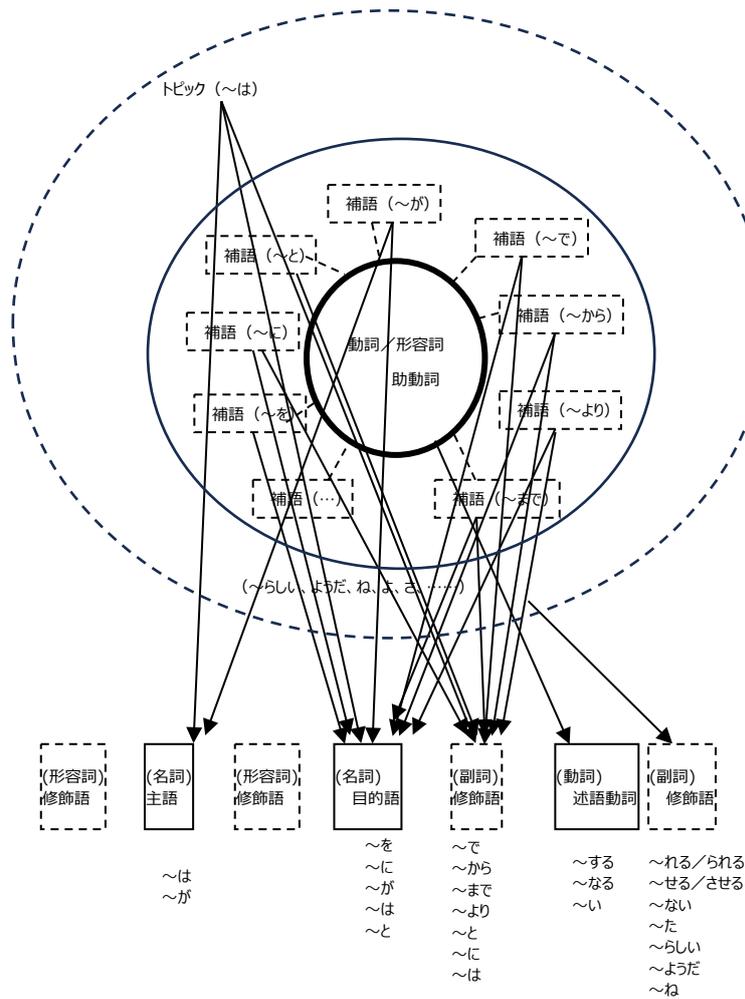
- 目前の「見え」の世界をそのまま図に市ただけの「和」の日本語の構文とは異なり、「漢」の日本語の構文では分析的な思考が働いている。言い換えると「漢」の日本語の構文は文としての構造化がきっちりとなされている。
- 「漢」の日本語の文の構造は大きく分けて「述部」と「補足部」に分けることができる。「述部」は、中核となる動詞/形容詞/名詞とそれを補足する各種モダリティ要素から構成される部分である。「補足部」は、「補語プラス格助詞」要素と「トピック」要素から構成される部分である。
- 補足部は文にとって任意の要素である。ゆえにそれがなくとも文になる。具体的にいえば、「～は、～が、～を、～に」などの要素がなくとも文は成立する。
- 「漢」の日本語の世界を眺める視点は、話し手/書き手の目から離れて天に浮かんでいる。こうした「客観的」視点からは、話し手/書き手の心の動きに寄り添ったように生々しく表現することはない。あるいはそれをすることができない。あたたかで情感豊かな「和」の日本語の世界とは異なり、「漢」の日本語の世界はクールであり理知的である。
- 「洋」の日本語とは明治以降に日本語が受容してきた西欧語の語彙および構文、思考方法のことである。

### 「洋」の文構造



- 「洋」の文構造について私は「和」の文構造から「洋」の文構造へと変形されたという考え方が成り立つと考えている。

### 「和」の文構造から「洋」の文構造へ



- 「洋」の文構造と「和」「漢」の文構造との本質的な違いは、まず「主語」(Subject の翻訳語)、  
「目的語」(Object の翻訳語) という西欧語の文法概念が最初から用意されている点にある。
- 「洋」の文構造は、当初はフィクション(虚構)であったが、日本社会(なかでも学問の世界)の急激な  
西欧化のなかで一種のリアリティ(実在)へと変化していった。一部の日本人(なかでも学者た  
ち)が「洋」の文構造にあわせたかたちで実際に日本語の文章を書き始め、そしてそれが西欧化の  
道を歩み続ける日本社会において価値あるものとして受け容れられた。
- ただしそれらの日本語の文章は日本語の生来の性質を無視したものであったことから必然的に言語  
として歪んでおり、クオリティも低劣である。だがそのようにわかりくい悪文であることこそが「洋」の文構  
造の日本語文章にとっての高評価の源泉ともなっている。

### 3章 「～は」

#### 【要約】

- 「は」は、「モダリティ」領域における「主題/トピック」を示す機能を持つ。また「は」は、「命題」領域にお  
ける「格関係」を示す機能も併せ持つ。
- 「和」の文構造からみた「～は」とは、話し手/書き手が何かの事態を表現する際の「場」を設定した  
いと考えたときに用いる言語表現である。
- 「漢」の文構造からみた「～は」とは、天の視点からみて話し手/書き手と聞き手/読み手の二人が一  
緒に注意を向けている物事を示すものである。これを「トピック」と呼ぶ。
- 「洋」の文構造からみて「～は」とは、英文法の Subject (主語) を示すものである。いまの日本人  
は翻訳文体を用いて近代西欧的な思考を日本語によっておこなっている。そしてこの世界を主体・  
客体の対立構造として捉えることに違和感を持たなくなり、そこから生み出された思考を「～は」「～  
が」を「主語」として日本語で表現している。
- この意味で現代日本人の頭のなかの半分はすでに西欧化しているといってよい。そしてその半分西  
欧化した日本人の思考を表現するには日本語にも「主語」がなければならず、その西欧的発想にお  
ける「主語(主体)」を示すマーカーのひとつが「洋」の文構造における「～は」だと考えることができ  
る。

### 4章 文要素のトピック化

#### 【要約】

- すべての補語要素は、「～は」によってトピックの兼務が可能である。
- 「～は」の表現方法は格助詞のタイプによって異なる。
- 具体的にいえば、1文字の格助詞(「が・を・に・の・へ・で・と」)については、「は」に置き換わるかた  
ちで、それぞれが持っている格関係をトピックとともに表すことができる。
- また1文字の格助詞のうちで、「が」「を」「の」に関しては「が→は」「を→は」「の→は」という置き換え

を必ず行わなければならないが、それ以外の1文字の格助詞（に・へ・で・と）については、置き換えることもできるし（に→は、へ→は、で→は、と→は）、置き換えずに「は」を付加することもできる（に→には、へ→へは、で→では、と→とは）。

- 2文字以上の格助詞等（から、まで、より、まで、他）については、「は」への置き換えはできない。
- 日本語人の心のあり方の顕著な特性としてモダリティを命題より優先する傾向が強いことが挙げられる。主体的な世界の捉え方が非主体的な世界の捉え方に優先すると言い換えてもよい。そのため表現においてもモダリティ表現（～は）が命題表現（格助詞）よりも優先されると考えられる。
- 命題の要素間の関係を示す表現として格助詞は必ず必要というわけではない。
- 「～は」の「～」にはトピックとなる名詞（体言）が入る。この名詞は「語」とは限らない。語のレベルを超えて「述部」あるいは述部を含む部分が名詞化されて「～」に入ってトピックとなることも可能である。これを「述部のトピック化」と呼ぶ。
- トピックを提示する「～は」は、次のトピックが設定されるまで文のレベルを越えてその効力を発揮しつづける。

## 5章 「～が/～を/～に/～の/他」

### 【要約】

- 「格助詞」は、まさに日本語の要（かなめ）である。なぜなら、格助詞さえつけば、あらゆる言葉は日本語へと変身できるからである。
- それぞれの格助詞は複数の意味を持つとされるのが、従来の文法での基本的な考え方である。私は「が」には「が」の、「を」には「を」の、「に」には「に」の、「で」には「で」の、それぞれ独自の「意味」があるものとする。すなわち機能的な意味の根底には、「こころの働き」があると考える。
- 「～が」について——和の観点からみた「～が」の基本の働きは、「視線の行き所」（焦点）を示すものである。漢の観点からみた「～が」は、日本語文法でいうところの「主格補語」を表す洋の観点からみた「～が」は、「主語」を示す。なお、ほとんどの学問の分野においては、現代日本語人は英文和訳体なしでは適切に思考し表現することがもはやできなくなっている。
- 「～を」について——和の観点からみた「～を」は、場の出来事に直接関与する対象を表す。「直接関与」といっても、そこに使われている動詞が「～を」で示されている対象とのあいだに「主体と客体の関係」や「原因と結果といった関係」がつかねに成立しているわけではない。漢の観点からみた「～を」は、「～する」系動詞が表す行為の対象を表す。洋の観点からみた「～を」——2つの実体間の影響-被影響の関係性を示す。
- 「～に」「～へ」——和の観点からみた「～に」「～へ」は、自分から離れたところにあるものの認識を示す。漢の観点からみた「～に」「～へ」は、到着点に向かう認識を示す。洋の観点からみた「～に」「～へ」は、英語の to/for が持っている機能（方向、到着点）に対応する認識を示す。「～に」と「～へ」はともに到着点に向かう認識を示しているが、「～に」には到着点とつながるという認識イメージがある一方で、「～へ」の持つ認識は到着点とつながるかどうかとは無関係である
- 「～と」——和の観点からみた「～と」は、モノやコトを次へと「つなぐ」という認識を示す。漢の観点か

らみた「〜と」は、モノやコトが「つながっている」という認識を示す。洋の観点からみた「〜と」は、英語の and/with が持っている機能（並列、結合）に対応する認識を示す。

- 「〜で」——「〜で」に関しては和・漢・洋の観点に分けて分析する必要はない。いずれもコトの限定条件をそこに置くという共通の認識があるとみてよい。私たちが「〜で」を使うときに大事なものは、コトに対する限定条件をつけるという意識である。
- 「〜から」「〜より」——「〜から」「〜より」に関しても和・漢・洋の観点に分けて分析する必要はない。いずれも述べようとするコトの「起点」の認識を示す。「〜から」を伴う事態には動的なイメージが感じとれるのに対して、「〜より」を伴う事態は静的なイメージである。

## 6章 名詞（体言）

### 【要約】

- 「和」の日本語での世界認識は「述部」（動詞）中心、いいかえると「場」の实在を中心にして組み立てられている。そのため、名詞（個）に対する認識と表現は英語に比べると「おおざっぱ」であり、細かくない。「和」の日本語の世界では英語のような「モノ」に対する複雑な認識は存在しない。
- 日本語は強い「有生性」を持つ言語である。いっぽうで英語（を含む西欧語）における認識と表現では、「有生性」はほとんど認識・表現されない。
- 日本語は「助数詞」を持つ言語である（英語は助数詞を持たない）。「数助詞」は多種多様であり、その数は数百に及ぶとされている。一般的なものとしては「本」「枚」「冊」のほか「個」「匹」「羽」「組」「杯」「点」「件」「回」「着」「基」などが挙げられる。
- 「漢」の日本語における名詞認識・表現は、「和」の日本語での名詞認識・表現とほぼ変わらないと考えてよい。「洋」の文構造での名詞認識は一部の学術論文においていくつかの表現として用いられている。
- 英語における「既知・未知」「可算・不可算」「単数・複数」の認識を日本語に移すためには英語の世界認識と日本語の世界認識の違いというきわめて本質的な難題を乗り越えなければならない。単純な言語表現の一对一対応といった処理ですむ話ではない。英語の the, a, 単数/複数に日本語を対応させるというのは無知で愚かしい行為である。

## 7章 動詞（用言）

### 【要約】

- 学校国文法モデルでの品詞表は意味論と形態論と機能論を混在させてうえて日本語の世界と西欧語の世界との両方になんとか適合させようとして作られたものである。明治の時代にはこれをつくりだすことが日本人としてできる精一杯のところだったに違いないが、真の問題は、これをいつまでも使い続けているという点にある。
- 日本語の世界には、この「こと」（できごと）の捉え方として、「ある/いる」「する」「なる」という3つの系統を持っている。これらの系統は単独で用いられるだけでなく複合的に用いられることも多い。
- 「ある/いる」は、なにかが存在することを示す表現である。「ある/いる」とペアをなす「ない/いない」は、

なにかが存在しないことを示す表現である。つまり日本語の「ない」の基本は「非存在」である。「こと」の「否定」を示す英語の not と同じではない。

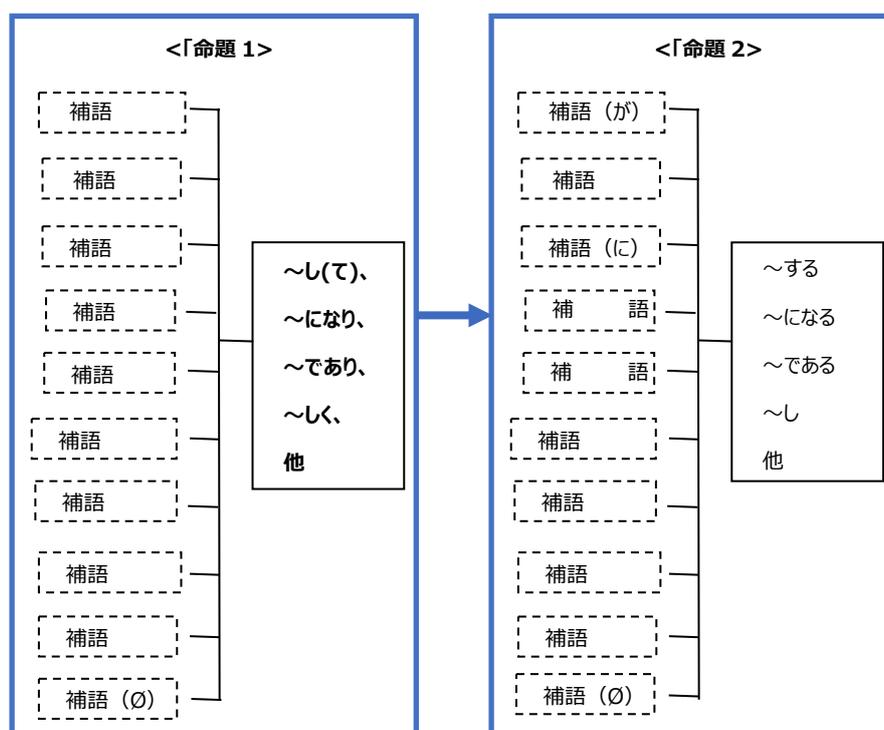
- 「する」は、なにかの行為や状態が発生することを示す表現である。なにかの行為や状態が発生するというのは、私たちの身のまわりでもっとも頻繁に生じている事態であるから、「する」は私たちの言語表現のなかでもっとも頻繁に用いられる表現である。
- なかでも「漢語＋する」は学問や実務の文章での定番表現である。また、「カタカナ語＋する」の動詞はコンピュータ分野、ファッション分野、金融分野など、新しく日本社会に入ってきた分野で数多く用いられる。
- 「漢語／カタカナ語＋する」のかたちは、日本人が他の文明の概念を日本語に取り入れるために用いてきた創意工夫のひとつである。外国の概念を映し入れるのであるから、理解はどうしても中途半端なものになる。そのため「～する」の○○の部分については、じつは意味がよくわかっていないケースがしばしばある
- 「なる」は、なにかの行為や状態が「おのずとから」「自然に」発生することを示す表現である。なにかが「おのずとから」「自然に」「かってに」発生するという認識は日本語の世界では当たり前のことであるが、英語の世界はそうではない。「なる」は、きわめて日本語らしい動詞表現である。
- 「する」認識も「なる」認識も、どちらも人間の認識形態としては自然なものである。現在の日本語人は「なる」認識と「する」認識をうまく使い分けている状況である。
- 学校教育などをつうじて西欧メガネをかけて日本語を見る態度がしみ込んでしまった私たちにとって、日本語の原点である「和」の日本語の世界をありのままに見ることが特に大切である。
- 英語などの西欧語には文法カテゴリーとしての「時制」がある。だが、中国語や（「和」の）日本語のような言語にはそれはないと考えてよい。したがって日本語においては、「～る」を現在時制のかたち、「～た」を過去時制のかたち、と見なす必要はない。
- 「和」の日本語では、「～る」「～た」のいずれを使うかで、そのコトが主観的にみてまだ終わっていないのか、それともすでに終わってしまったのかの区別をつけている。この、心のなかにおいて「まだ終わっていないか」「もう終わっているか」の区別が、「和」の日本語での時間の流れに対する基本認識である。
- ただしここでいう「終わっている、終わっていない」とは、物理的なものではなく心理的なものである。日本語人にとって「とき」は、心のなかにあるのである。
- 「読み終わる」「書き上げる」「思い込む」「飲み過ぎる」「見落とす」「取り扱う」「聞き漏らす」のように2つの動詞を結合したものを「複合動詞」という。日本語は、こうした複合動詞の利用が非常に多い言語である。
- 日本語では、さまざまなかたちで叙述内容に対する判断と相手に対する態度の表明を行う。
- 「和」の世界認識で「れる／られる」が表しているのは、その「コト」（命題）に対して話し手/書き手の力が及ばないという「無力感」の認識である。「～せる／させる」は、コトに対して話し手/書き手の支配力がきわめて強く及ぶという認識である。
- 「テ形」は、「コト」に対する話し手/書き手の「存在」「継続」「完了」などの判断を示している。

- 「～ない」は、コトの「非存在（非在）」性を話し手/書き手が判断したことを表す言語表現である。
- 「～らしい・ようだ・そうだ」は、コトの内容について話し手/書き手が自分の五感や外部情報を使って予想をするときに用いる。
- 「～ね・よ・さ」は、話し手/書き手の聞き手/読み手に対する態度を表す。
- 「～か」は、聞き手/読み手に対してコトに対する確認を求めるための表現である。
- 「～なあ、ねえ、ぞ」は、聞き手/読み手に対してコトに対する同意を求めるための表現である。

## 8章 複文（分子命題文）

【要約】

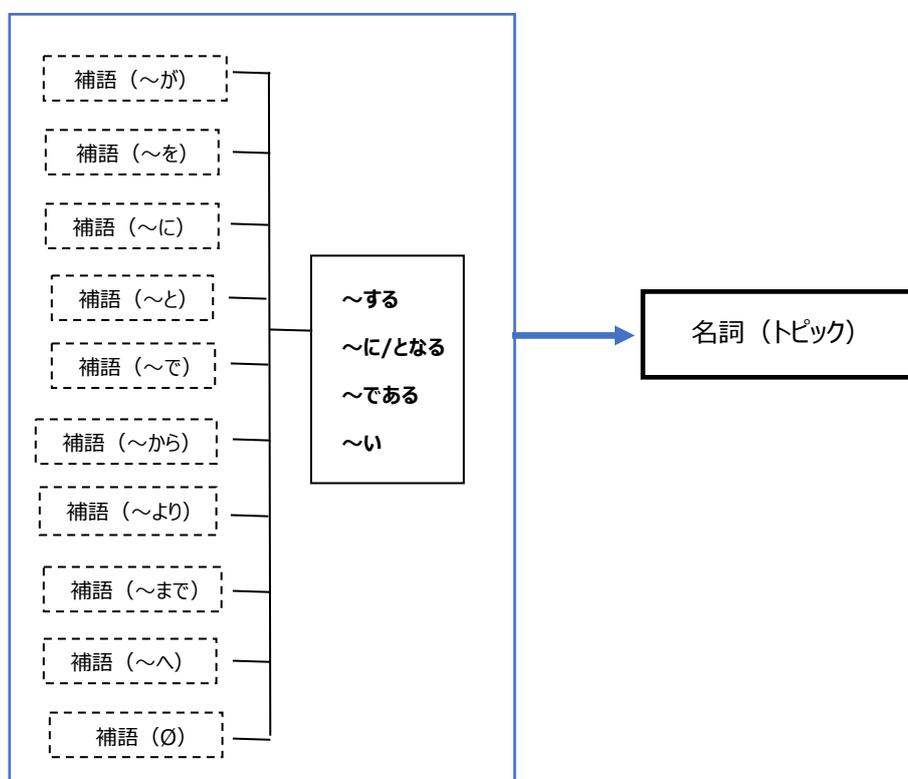
- 連用展叙（連用中止）とは、関連する命題情報をひとつの文にまとめて表現するために日本語が用意した表現技法のひとつである。



- 連用展叙は、関連する情報内容をひとつの文としてまとめて表現するために非常に有効な表現技法であるが、その有効性には限度がある。連用展叙や接続の「が」を使いすぎることが文章の価値を下げてしまうこともある。こうした限度を認識しつつ、私たちは連用展叙を有効に活用していく必要がある。
- 連用展叙(連用修飾)に比べると、連体展叙(連体修飾)は構造がかなり複雑である。また、連体展叙は現代日本語にとって重要な役割を有していると同時に、日本語文章の価値の下落を引き

起こす原因もはらんでいることを忘れてはならない。

- 日本語の世界においては、思考のまとまり(原子命題)ごとに思考を一元的かつ動的に展開していくための用法は大きく分けて3つある。「終止」「連用展叙(連用中止)」、そしてここで説明をする「連体展叙(連体修飾)」である。
- 「終止」用法では、ある思考が述語でまとめられたあとに、そこで思考のまとまりとしての文はいちど完結する。その際の書き言葉の表記としては、基本的に句点(～。)が用いられる。「連用展叙(連用中止)」用法では、ある思考が述語でまとめられたあとに、その述部に連用形が使用されて、次の思考のまとまりへと導かれていく。表記としては基本的に読点(～、)が用いられる。第3の方法が、ここで取り上げている「連体展叙(連体修飾)」用法である。



- 一元的かつ動的な理解という観点からみると、「連体展叙」用法は、終止・連用展叙とその本質がまったく違う。なによりも重要な点は、連体展叙ではそれが用いられた段階でそこまでの情報構造がまだ確定をしていないということにある。そしてこの点が連体展叙のもたらす文章理解上の深刻な問題点につながっている。
- 連体展叙(連体修飾)とは、まずある思考の述部が表現され、そのあとに、その内容のトピック情報を示す体言(名詞)へと連なっていくというものである。いわば、トピックの「後出し」処理である。
- このような複雑な心的操作をしてまで連体展叙を用いるのは複数の命題間の結束性を高め、精緻な思考を表現しやすくするためである。

- 連体展叙には命題間の結束性を高めて精緻な思考を表現しやすくするというプラスの側面がある一方で、連体展叙を用いると複数の解釈が可能となるケースが生じてそれが文のわかりやすさを阻害してしまうというマイナスの側面がある。
- 言語の要素間ではお互いに「距離」が近い要素同士で意味が連結するという傾向が強くある。その際、心理的距離（物理的距離と意味的距離の総合）が近い関係にあるものが、文中で近くに配置されるという法則がある（Behaghel の法則）。
- 複雑な連体展叙を使えば使うほど複数解釈の可能性が高まり、それを改善する方法も限られてくる。その結果、わかりにくい悪文となる可能性が高まるのである。最良の改善策は、連体展叙の利用を必要最小限に抑えることである。

## 9章 語彙・表現

### 【要約】

- 現代日本語は語彙の領域においても、やまとことば、漢語、西欧語（翻訳漢語・カタカナ語）という3つの語彙体系に支えられた「三脚」言語である。
- 「やまとことば」は、私たちの「こころのふるさと」である。それは日本の土地で生まれ、日本の自然や文化を背景にして数千年にわたって生きてきた言葉である。その中心は対人的な情意の表現にあり、現代の話し言葉や書き言葉のなかにその特質は変わることなく生きている。
- 漢語を千数百年前に受け入れた日本人は、やまとことばをふるさとの言葉として残しつつ、漢語を理知の言葉として新たに採用するという方法で日本文明を構築していった。
- 19世紀になって西欧言語（なかでも英語）を受け入れる際に漢語というフィルターを通して日本語に受け入れることにした。こうして明治期に膨大な数の「翻訳漢語」が生み出された。その数は数万語におよぶとされている。その数万語の翻訳漢語を利用して日本人は西欧文明を急速に日本文明に導入していった。
- こうして現代の日本語は、やまとことば、漢語、翻訳語（じつは西欧語）の3つの言語に支えられた「三脚」言語となった。
- この3つの語彙のどのひとつがなくとも現代日本語はうまく機能しない。生物学的な比喻をすれば、細胞内にミトコンドリアや葉緑体という別の生命体を取り込んだ「細胞内共生」のかたちにも似ている。3つのうちのひとつでも機能しなくなれば全体が死んでしまうのである。
- 漢語表現は「思考のカプセル化」のツールとして、あらゆる領域のあらゆる水準での理知的な認識・思考に用いられている。
- 漢語は日本語での認識・思考・表現に多大なメリットを生み出している。複雑な認識・思考であっても、それを漢語化することによりシンプルなかたちで日本語表現のなかに埋め込むことができる。その一方で、漢語を使えば、あまりにも簡便に認識・思考を認識・思考・表現できるために、その理解や活用が得てして中途半端なものや軽々しいものに終わりがちである。
- 「心と言葉のグローバル日本語文法」でのカタカナ語の使用基準は、私たちの認識・思考・表現に新たな価値を生み出す場合にだけカタカナ語を利用し、それ以外での使用は極力避けるというもので

ある。

## 10章 文章

### 【要約】

- 日本語文章の最大の目的は作者が読者と心を通じ合わせることである。何かを伝えるという目的はその次である。「意見文」と呼ばれるものであっても実質的には自己の主張のみで押し通すことは日本語の文章では許されない。他者の意見に配慮することがつねに求められる。
- 現代日本語には論じるに値するほど純粋な理知的文章の「型」はない。そしてこの劣悪な状況を打破するために現代日本語の文章における新たな「型」を創り出すことが私たちに与えられた役割である。
- 現代日本語の「段落」は英語の「パラグラフ」とは一致しない。だからといって西歐的文章構成モデルを日本語文章にそのまま利用しようとしてはいけない。「パラグラフ」は西歐の世界認識や言語構造をベースとしたものであって、日本語への適用がそもそも非常に困難である。英語で考えられた文章構成原理は「日本語による作文にも共通する原理」ではない。ゆえに私たちは西歐語と日本語の本質的な差異を十分に認識しつつ、西歐的文章構成理論を包含しながらも、それを超える文章構成モデルを生み出していかなければならない。
- 世界の諸文明の文章構成の「共通価値」としては、「主題」「よい流れ」が挙げられる。ゆえに、これからの日本語文章の構造モデルを考える際には、①「主題」が存在し、かつ明確であること、②文章としてよい流れをもっていること、の2点をモデルのベースとして設定すればよい。